

令和4年度第3回 京都市市民参加推進フォーラム 摘録

■開催日時：令和5年1月27日（金） 午後1時～午後3時

■開催場所：京都市役所本庁舎4階 正庁の間

■議題：

市民参加の裾野拡大の進捗状況について

■報告事項：

- （1）セカンドライフ×まちづくり活動応援セミナー（中間報告）
- （2）市民参加に関係する新しい事業等

■公開・非公開の別：公開

■出席者：市民参加推進フォーラム委員 10名

荒木委員、乾委員、金田委員、白水委員、菅谷委員、並木委員、原田委員、松永委員
村田委員、森川委員

■傍聴者：1名

■特記事項：

動画共有サイトYouTube（ユーチューブ）を利用し、後日、音声配信を実施する。
Zoomを用いたWeb会議と併用開催した。

【議事内容】

1 開 会

2 委員紹介

3 議題 市民参加の裾野拡大の進捗状況について

<森川座長>

・それでは、早速、議題に入る。「市民参加の裾野拡大の進捗状況について」事務局から説明をお願いします。

<事務局>

（資料1「市民参加の裾野拡大の進捗状況について（公共の授業との連携）」説明）

<森川座長>

- ・ まず、資料1の前半部分、公共の授業との連携について、教育委員会事務局 学校指導課との協議の中で、積極的な反応をいただいているところではあるが、何かご質問等はあるか。

<原田委員>

- ・ 授業目的について、「多面的に考察する力」というのは大人でも難しいが、どのようなレベル感を考えているのか。「多様な立場からの視点」や「自分ごと化」のレベル感も気になった。

<事務局>

- ・ まず、高校によって求められるレベルが違うということが前提としてある。社会経験が浅い高校生が、社会の仕組みを知らないまま一面的・表層的に考えるのではなく、集団でみんなの意見を聞いた後に考え直すことで、問題の捉え方が変わるという状態を目指している。

<荒木委員>

- ・ 外部の方に授業に来てもらいたいとのことであるが、町内会長のような地域の年配の方なのか、NPO法人で活動する方なのか、どのような人が想定されているのか。

<事務局>

- ・ その問題に取り組んでいる当事者を想定して「外部」と表現している。取り組む課題は、一般的で大きなテーマではなく、京都らしいニッチでリアルな課題がありがたいと言われている。

<荒木委員>

- ・ それであれば、課題意識を持って取り組んでいる人に「上手くいっていること」や「ここが難しい」という内容を話してもらうことになるであろう。

<事務局>

- ・ 現時点では、課題に関わっている市の職員が話すことをイメージしている。

<乾副座長>

- ・ 先ほど質問のあった、「期待されているレベル感」について補足したい。
高校授業の課題解決の発表で多いのが、「SNS 活用」や「リサイクル」など一般的なものである。それが本当に効果的なのか、ということを現場の人から意見をもらい深く掘り下げて考えることが重要である。ただし、それはとても難しいものであるため、先生方も困っておられるという意味では、連携授業に期待されている部分ではないか。

<森川座長>

- ・ その課題に最も近い現場の方を高校の授業に繋いでいく連携を仕組化するうえで、市民協働推進担当がマッチング機能を担うと想定できる。市民協働推進担当が既に持っているネットワークはもちろん、市民参加推進フォーラムのメンバー自身も協力すればいいと思うが、来年度はどのような構造で進めていくと想定しているのか。

<事務局>

- ・ 後半の京都奏和高校との連携は、生徒自身がテーマを選び、外部の人をマッチングするという協力を想定している。一方で、公共の授業との連携については、テーマは先生と市民協働推進担当である程度決めておき、そこから生徒に考えてもらうことになる。

<原田委員>

- ・ 地域課題には様々な側面があるため、生徒の中で地域課題が偏らないようにインプットする必要がある。行政からの地域課題しか出さない場合の偏りもあるため、丁寧な対応を心掛けたほうが良いと思う。
- ・ インタビューの対象者も大切である。インタビューをする人によっては、かなり偏った意見を持っている可能性があるため、例えば、市民参加推進フォーラム委員や企業の方などがインタビューを受ける対象になってもいいかもしれない。

<事務局>

- ・ 教育委員会との協議の中で、その点については、現場の先生にある程度フォローしていただけたとのことであった。

<並木委員>

- ・ 今回、高校との連携授業での大きな目的は、対話型パブリック・コメントの手法を体験してもらうことにより高校生をまちづくりの主体化することであると思う。それには、2つやり方があると考えている。
- ・ 1つは決められた計画等に対して意見を出すパブリック・コメントというプロセスを体験することである。

- ・ もう1つは、与えられたお題に対して、自分たちのプランを考え、それに対してパブリック・コメントのような場を設けて意見をもらう方法である。意見をもらうことは共通しているが、自分たちで学び、プランを作るプロセスも入れられるため、後者の方がより効果が出てくるのではないかな。
- ・ 今後のパブリック・コメントで、京都市の政策として高校生枠ができて面白いと思う。

<事務局>

- ・ まだ確定はしていないが、必ずしもパブリック・コメントを題材にしなくても良いと考えている。実際のパブリック・コメントがある時期に合わせようとする、時間的制約を受けるためである。

<森川座長>

- ・ それでは、後半の京都奏和高校との連携について、事務局から説明をお願いします。

<事務局>

(資料1「市民参加の裾野拡大の進捗状況について(京都奏和高校との連携)」説明)

<森川座長>

- ・ 一点、補足する。参考資料7は、「ビジテック」の授業について検討している京都奏和高校の教員が作成したものである。
- ・ ビジテックの取組には、市民参加推進フォーラムとは別のつながりではあるが、篠原副座長が参画されており、市民参加推進フォーラムとしても連携できないかということである。

<並木委員>

- ・ とてもユニークな取組だと思う。どのような枠組みで実施されるのか。

<事務局>

- ・ 総合的な探究の授業の枠組みで実施される。外部の人や他の科目の教員も巻き込んで実施する実験的な授業だと感じている。

<村田委員>

- ・ 総合的な探究の時間は正式な科目か。

<事務局>

- ・ 学習指導要領の中でも位置付けられている正式な科目である。

<村田委員>

- ・ 一学年の生徒は何名くらいか。

<事務局>

- ・ 一学年だけで実施するため、数百人という規模にはならないと思う。
(1クラス20名、定員80名)

<村田委員>

- ・ 以前、テレビ番組で京都奏和高校の取組が紹介されていた。それを観て、自主性や社会と関わる力を身に付けるために外部の方と直接関わるのが非常に効果的だと感じた。

<原田委員>

- ・ とても良いプログラムだと思う。生徒たちの目的やゴールはどこになるのか。

<事務局>

- ・ 京都奏和高校の教員との話でお聞きしたのは、特性を抱えた生徒を特別扱いするのではなく、生徒たちが自ら描いたプランに基づいて行動する経験をしてもらいたいということであった。結果が重要なのではなく、自ら社会に関わることができたという体験をすることを重要視されている。

<菅谷委員>

- ・ 市民参加の裾野拡大というテーマの中で、高校生が市政に参加するきっかけをどのように作るのが大きな要素であると思う。京都奏和高校での連携授業を他の高校でも実際に実施できるのかを考えたときに、市民参加推進フォーラムとしてどういうものを用意し、テーマを提供できるのか、高校の先生方が使えるように仕組みを整える必要がある。

<森川座長>

- ・ 年度当初の議論でもあったとおり、現場の先生に負担をかけすぎない形で実施してみようという話であった。まずはモデル的に実施した上で、その先にどのように広く展開していくか考えていかなければならない。

<事務局>

- ・ 来年度、試行実施する中で、学校での普及しやすさのコツが見えてくると考えている。

<並木委員>

- ・ 京都奏和高校との連携は、前半の「公共の授業との連携」とは全く別の話である。これをすべての学校に広げることは難しい。「ビジテック」の授業名から受ける印象としては、民間企業との連携で課題解決するという昨今流行りの取組であると思うが、市民参加推進フォーラムで議論している「住民自治」「市政参加」の推進とはズレがあり、本フォーラムの目的と同じ方向で進められるように高校教員とすり合わせをして作り込む必要があるかもしれない。

<森川座長>

- ・ 高校教員の感触はどうか。主権者教育に力を入れたいという思いがあるのか。

<事務局>

- ・ 京都奏和高校に関しては、市政参加よりもまちづくり活動とつながりたい思いが強いようである。本市としても市政参加の方向に無理に引っ張ろうとは思っていない。

<原田委員>

- ・ 普段、起業家支援や、高校・大学での授業をする機会がある。生徒にフィードバックするのは、市の職員やフォーラム委員だけではなく、地域企業の経営者の方などもクリティカルなフィードバックをしてくれると思う。
- ・ 「ビジテック」の「テック」とは、どのような技術のことか。生徒自身がそのような技術を持っているということか。または、外部リソースを活用するのか。

<事務局>

- ・ 元々、伏見工業高校の工業科の流れを受け継いでいるため、技術や能力を持った生徒が多いと聞いている。それをいかして、生徒に社会での自身の役割を見つけさせたいという思いがあるようである。

<乾副座長>

- ・ これらの連携授業を進めるにあたって、市民参加フォーラムとしての関わり方も改めて検討した方が良いのではないか。

<森川座長>

- ・ 参考資料7に記載されている「フォーラムに期待すること」等は、京都奏和高校側からの期待であり、オファーであるとも言うことができる。一旦、モデル授業として実施してみるとして、その後、一般化することは可能かどうかは次の段階である。今回のモデル授業に関しても、本フォーラムとしてどこまで応えることができるか。

＜荒木委員＞

- ・ やはり、公共の授業と「ビジテック」の授業は、授業の枠組みも目的も違うため、全く別物と割り切って考えたほうがいいと思う。公共の授業は、元々の市民参加推進フォーラムの目的に近いが、「ビジテック」のコンセプトがビジネス寄りの話か、「まちづくり活動」系の話かについては、生徒が設定するテーマの内容から見極める必要がある。
- ・ 内容によっては、産業観光局につなぐ話かもしれない。もう少し生徒が取り組むテーマが絞り込まれないと、関わり方が判断できない。

＜白水委員＞

- ・ 2021年度まで、深草支所でまちづくりアドバイザーとして地域課題の解決に関して京都すばる高校や京都工学院高校との連携等を支援していた。既に、地域によっては地域課題に関して連携授業をされている高校もあるため、各区のまちづくりアドバイザーから類似の授業モデルがないか情報を吸い上げてみてはどうか。

＜乾副座長＞

- ・ 市民参加推進フォーラムがコンサル的にマッチングに関わるのか、連携授業の評価をする立場になるのか、また、実行委員会的な組織体も必要であると考え。このような体制も含めたモデルが確立すれば、連携授業を広げていくことができたため、引き続き議論が必要な論点である。

＜森川座長＞

- ・ このモデル授業をこなしながら検討していく必要がある。高校の授業を支援する素材は様々あるが、仕組み化するのであれば、コーディネート機能がないと難しい。今回の京都奏和高校には、その役割を担うことができる教員がおられるため上手く進みそうであるが、菅谷委員のご意見にもあったように、これを広げていくことを考えると仕組み化と市民参加推進フォーラムの関わり方は考えていかなければならないところである。
- ・ 附属機関としての市民参加推進フォーラムが、コーディネート機能や1つの事業の主体となることは難しいかもしれない。ただし、実行委員会が立ち上がり、その構成員となるような関わり方はあり得るだろうし、大事な視点である。

＜金田委員＞

- ・ 荒木委員の意見もあるように、京都奏和高校との連携と前半で話されたプログラムは別物で検討したほうが良いと思う。また、参考資料7には、ビジテックのプログラムに市民参加推進フォーラムとの協働と書かれているが、市民協働のテーマと重なるかどうかを前提に、つながるのであれば、そこでの役割を検討する必要がある。
- ・ 先に協働ありきで、つながってから関わりを考えるとお互いに齟齬が出るのではないか。

<松永委員>

- ・ 荒木委員のご意見にあるように、前半の話と後半の話は別物として考えるべきだと思う。また、現場で努力されている先生方のオーダーに市民参加推進フォーラムとしてもできるだけ応えていく関係性が望ましいと思う。

<乾副座長>

- ・ 京都すばる高校の連携授業の事例を共有させていただく。文部科学省の指定を受けて、3年間取り組んだ。これから自走していく上で、どのように進めていくか迷っておられるところだと思う。こちらは府立高校であるが、京都市在住の生徒がほとんどであると考えられるため、今後、京都すばる高校の取組の話聞くなど、参考にしながら進めていければ良いと思う。

<森川座長>

- ・ 来年度は、前半の連携授業はパッケージ化して広げていく方針で、後半の話はオーダーメイド型としてニーズにお応えする方針で具体的に進めていく。

4 報告事項

報告事項（１）セカンドライフ×まちづくり活動応援セミナー（中間報告）

<事務局>

（資料２「セカンドライフ×まちづくり活動応援セミナー（中間報告）」報告）

<森川座長>

- ・ 質問、ご意見等はあるか。無ければ、次の報告事項に移る。

報告事項（２）市民参加に関係する新しい事業等

<事務局>

（資料３「市民参加に関係する新しい事業等」報告）

<森川座長>

- ・ 質問、ご意見等はあるか。無ければ、参考資料８の説明に移る。

<事務局>

（参考資料８「第２回市民参加推進フォーラムの資料５に係る補足説明」）

<森川座長>

- ・ 前回の会議で、森実委員からご質問いただいた件への事務局からの回答であった。

来年度の市民公募委員サロンについて

<森川座長>

- ・ 10分ほど時間に余裕があるため、事務局が来年度の企画をするにあたって、「市民公募委員サロン」について委員の皆さんからのご意見をいただきたい。

<乾副座長>

- ・ 今年度は、市民公募委員サロンを1回実施したが、昨年度までは2回実施していた年もある。実施回数を2回に戻した方が良いのか、あるいは、市民参加の裾野拡大に取り組んでいる現時点では1回のままで良いのか、回数や内容についてご意見いただきたい。

<原田委員>

- ・ 市民公募委員サロンに参加して、各市民公募委員が審議会の中で話しやすくなるようにする目的は達成されていたと思う。その中で「座長が怖い」「議題における論点が分からない」という意見が出ていた。これを受けてのアイデアであるが、1回目は市民公募委員から意見を吸い上げ、2回目は座長に集まってもらって市民公募委員から集めた意見を伝えたくて、審議会の進め方をレクチャーしてはどうか。

<並木委員>

- ・ 原田委員の意見に賛成である。2回とも市民公募委員だけを集める必要はなく、座長・副座長に意見の引き出し方やモデルケースを伝える内容でも良いのではないかな。

<荒木委員>

- ・ 賛成である。座長は大学の教授が務めておられることが多く、すべての方がファシリテーションを得意とされているとは限らない。そこをフォローする会を開催しても良いと思う。

<白水委員>

- ・ 市民公募委員同士がそれぞれのバックグラウンドが分からないという話も出ていた。議論を進めていく上で、バックグラウンドを知っている方が話しやすく、議論も円滑に進むため、そのような時間を設けることはできないかな。

<荒木委員>

- ・ 大阪府の審議会に初めて参加した際、オンラインで事前レクをしていただいた。どのような委員が参加しておられて、どのような目的で実施しているのかという情報を教えてもらえると参加しやすさが違う。京都市の他の附属機関等でどこまでやっているかわからないが、事前レクがあるのは大きいと思う。

＜森川座長＞

- ・ 市民公募委員サロン自体の数を増やすよりも、審議会側や事務局側への働きかけも併せて考えてみたいということかと受け止めた。今後も事務局とともに検討したい。

その他 傍聴者からの意見

＜傍聴者 1＞

- ・ 高校生にとってパブリック・コメントはハードルが高いのではないかと思った。パブリック・コメントにこだわらず、対話をすることや地域課題解決の体験をすることを重視すれば良いのではないか。先生方が授業の到達目標として高いハードルを設定されている可能性があるため、行政は一步引いた立場から判断し、調整した方が良いのではないかと思った。

4 閉会

＜事務局＞

第4回会議は令和5年3月頃に実施予定である。本日はありがとうございました。

以上